



この辺りは生垣で囲まれた住宅地で環境を継承するように生垣を残し、自然の石を積んでいる。



食堂はデッキと一体となり、深い軒の出に包まれた落ち着いた空間。

内デッキのある家 一つの棲家

17年前に二世帯住宅の設計依頼のあった施主から南側の土地を購入したのでまた設計をお願いしたいと連絡がありました。年月と共に当時小学生低学年、幼稚園だった子供たちが成人し、長女は社会人になり、三世帯が暮らせるように ついの棲家を設計することになりました。庭いじりの好きなおじいさんのために今の庭と新しい庭をつなぐ内デッキのあるプランとしました。道路から1FLまでバリアフリーであがれ、デイサービスで送ってくれた人や近所の友達とのコミュニケーションの場、車椅子から歩行器に取替える場、パブリックとプライベートスペースの距離をとる場、旧住宅とついの棲家とを繋げる場、南庭と北庭を繋げる場、庭いじりの間の休息の場と用途は多様です。切妻屋根の軒の出(1,350mm)が外壁を守り、日射を調整し、内デッキを通し風が室内へと流れ込み、プライベートの室の中央にはトップライトを設けさらに風の流れを起す。心地よい風の流れる落ち着いた空間が広がるついの棲家になりました。

南北をつなぐ内デッキ

巾2730mmの内デッキは外部デッキへとつながり、外部と内部の間に中間領域をつくることで暮らしやすくなる。床は木製で室内から素足で出ることが出来る。

バリアフリーで回遊性のあるプラン

道路からのアプローチは南北2方向あり、南のスロープは車椅子で1FLまで上りきれ、プランは行き止まりが無く回遊性を持たせている。

軒が深く包み込まれた空間

軒の深い家は日射しを調整し、雨風から建物を守り、メンテナンスが掛りにくく、軒は床から1.8mの高さで低く、室内外とも垂木が見え、屋根に包み込まれた空間は落ち着きがあり安心感を与える。

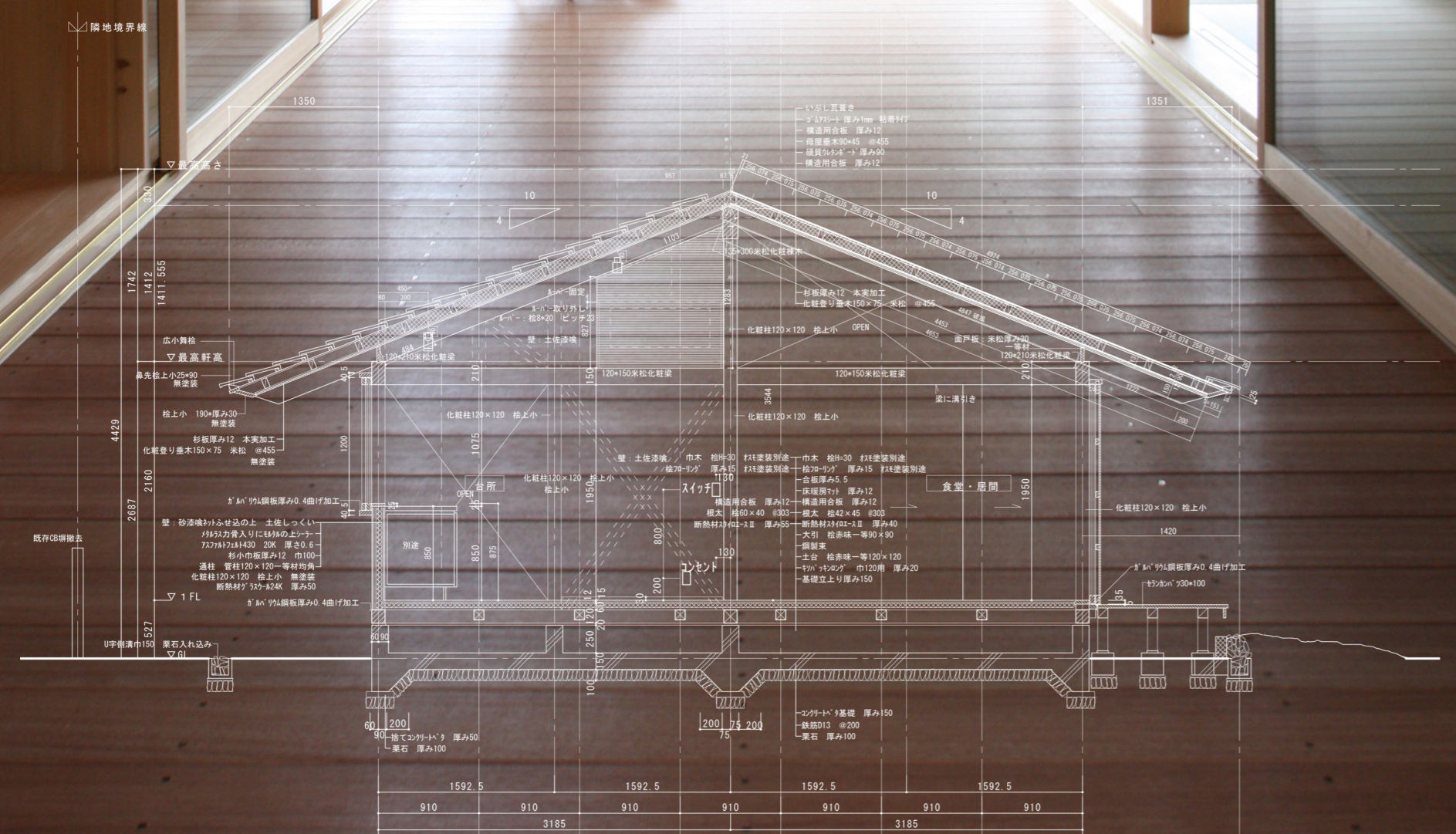
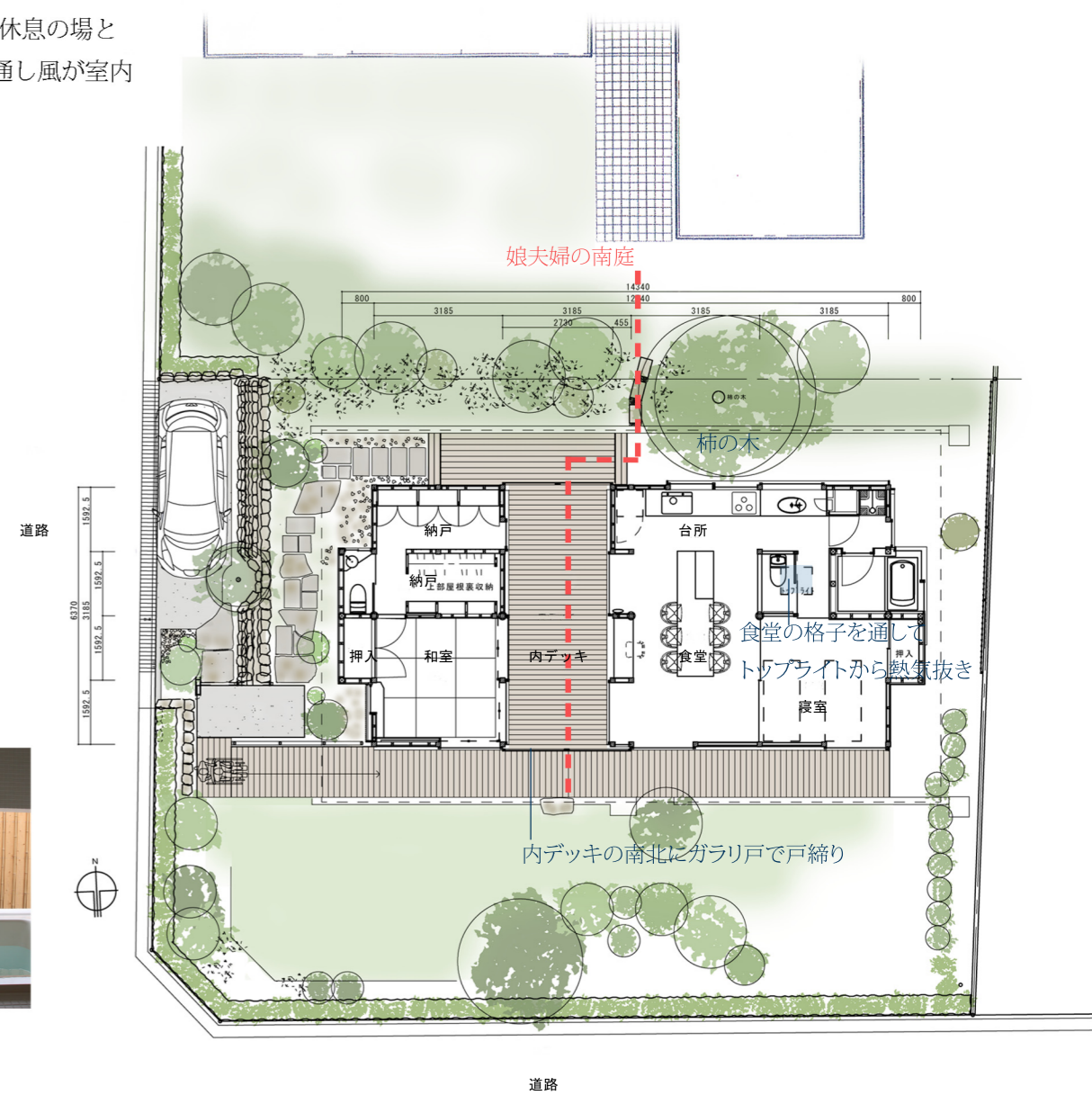
竹と桧の荒板の扉・門

門扉は竹を1本で軽く結界を作りアプローチから南庭が直接見えないよう、また水廻りの扉も竹と桧の荒板で作る。



真壁づくり

柱と梁の構造を見せ、スパン3185mm角(二間弱)で畳の大きさに6畳になるように決め、柱間は土佐漆喰を塗った。



和室は畳下に机が収納でき、簾戸は壁に引込まれ色々な雰囲気を楽しめ、網戸の役割も持つ。



台所北面の窓から柿の木が見え、南北の通風を確保し、中央のガラリはエアコンを隠蔽し、上部は天井に通じる。